

留学生支援における留学生センター「交流・相談室（105）」の役割

藤井 桂子・門倉 正美

【キーワード】 留学生支援、学生スタッフ、日本人学生との交流、相談活動、交流イベント

1. はじめに

留学生センター105室に学生（注1）をスタッフとする「交流・相談室（通称105・いちまるご）」（注2）を設置して約3年が経過した。「交流・相談室（105）」では、夏休み、春休み等の長期の休暇期間を除く前期、後期の期間、月曜日から金曜日までの毎日、昼休みを含む数時間部屋を開け、相談や交流にやってくる留学生に学生のスタッフが対応している。

日本人学生の留学生支援サークルや留学生アドバイザーが常駐する相談室体制はいくつかの大学で積極的な取り組みが見られるが、日本人学生がある部屋に毎日、一定の時間待機して、留学生と相談・交流活動を展開している事例はそれほど多くはないのではないだろうか（注3）。「105」の、こうした特徴を考慮し、これまでの活動記録やスタッフミーティングの資料、留学生利用者への聞き取り等を参考に、「105」の3年間の活動を振り返るとともに、留学生支援における105室の活動の役割と意味を分析し、考察する（注4）。

2. 「交流・相談室（105）」設置の経緯

留学生センターの「交流・相談室（105）」は、全学の外国人留学生支援体制整備の一環として、また留学生の日頃のニーズに応えることを目的として、2001年12月に留学生センターの1階105号室に設けたものである。

2001年度の「外国人留学生委員会（現国際交流委員会）」では、精神的に深刻な状況に陥る留学生に対して、より早期からのケアが必要なことが問題提起され、委員会内にワーキンググループを設け、メンタルヘルスの面だけでなく全般的な相談体制の強化を視野にいたした留学生支援体制の検討を進めていた（注5）。本稿の共著者である留学生センターの2名の教員は、当時ワ

ーキンググループのメンバーであり、ワーキンググループでの議論を契機に、留学生が深刻な問題状況に陥る前に、気軽に相談に立ち寄れる場をつくることが大切であると考え、留学生センター内に学生をスタッフとする「交流・相談室」の設置を提案することにした。留学生センターの教員会議に諮り了承を得て、まずは試験的にその年の12月より毎日一定の時間部屋を開け、活動を開始した。

こうした「交流・相談室」の必要性は、上記ワーキンググループで議論される以前から、日頃、日本語のクラス等で留学生と接する中で感じていたことであった。習った日本語で日本人学生と話してみたい、日本人学生と友達になりたいなど、日本人学生との交流を望む留学生の声をしばしば聞いていたし、また、日本に来て日の浅い留学生は、生活の上でも、助言や手助けを必要としている場合が多いことも、日本語クラスでの、そうした留学生とのやりとりからうかがえたからである。

日本の大学で勉強しているからといって、必ずしも日本人との交流の機会が自然と生まれるわけではない。国立大学に設けられているチューター制度はこうした留学生のニーズに応えようとする制度であるといえるが、実際のところ十分機能しているといえない面もある。チューターと留学生とのマッチングの問題もあるし、チューターが留学生のケアを一身にひきうけられるものでもない。大学院進学前予備教育研修生等、来日直後であってもチューターがつけられない留学生たちもいる。

また、異文化交流を求めているのは、留学生の側だけではない。学内には、留学生との交流を望んでいる日本人学生も少なからず存在している。著者のひとり（門倉）が担当している教養教育科目「異文化間コミュニケーション論」の受講を希望する日本人学生の多くは、国際都市横浜に位置する横浜国立大学の教育やキャンパスに、異文化交流の空気を感知して憧れをもっていたことをレポート等で述懐している（注6）。実際に、横浜国立大学は、留学生の日本人学生に対する比率という点で、全国大学の中でもトップクラスの高さを誇っているが、単に数字的にだけでなく、実質的に留学生と日本人学生の異文化交流が十分に展開されているかという点では心もとない面がある。

そこで、日本人学生との交流を求める留学生と、留学生との交流を求める日本人学生を出会わせることによって、留学生をケアし、サポートする〈場〉

としたいという発想におよび、日本人学生をスタッフとした「交流・相談室」設置の構想となった。

3. 学生スタッフの確保

「交流・相談室」設置のためには、日本人学生スタッフをどうやって確保するかがひとつの問題であった。留学生センターでは、この時期、日本人学生の出入りがほとんどなく、かれらとの接触が限られていたからである。そこでまず、短期交換留学後、留学生の見学旅行にチューターとして参加していた日本語教育専攻の大学院生に「交流・相談室」の設置構想を話したところ、彼女自身が協力を申し出てくれるとともに、短期交換留学の仲間や大学院生の友人たちへ声をかけてくれることとなった。また、上述の留学生支援検討ワーキンググループ委員の方々からも、部局での留学生チューター等に声をかけて頂いた。こうした働きかけによって、協力者が何人か集まり、その後105の立ち上げの推進力となってくれた学生に出会うこともできた。

実際の運営としては、1日2時間昼休みを挟む11時半から1時半までを開室時間として、学生スタッフは1日2人が1時間半ずつ（11時半から1時までと、12時から1時半まで）を担当し、昼休みの1時間は2人とも部屋にいるようにローテーションを組んだ。留学生センターのロビーで活動していた非常勤（週1回）の心理カウンセラーにも105を活動の拠点としてもらうことにし、カウンセラーが在室する時間（毎月曜日9:30～4:30）も部屋を開けることになった。学生を確保できなかった時間帯には、留学生支援検討ワーキンググループのメンバー有志の教員の方々にもスタッフを引き受けて頂いてのスタートであった。就職活動中の学生もいて、学生スタッフをコンスタントに確保することは容易ではなかったが、周りの協力のもと、なんとか運営していけるめどもたった。学生の口コミでスタッフ候補も増え、2002年度4月から、開室時間を3時間に延長し、本格的に「交流・相談室（105）」を運営していくことになった。学生スタッフへの謝金も若干確保することができた。

当初は留学生の相談相手として大学院生を中心に10名の日本人学生をスタッフとして確保し、ローテーションを組んで、105室に待機してもらう形の交流・相談活動を想定していた。しかし、実際ふたを開けてみると、昼休みにはふたりのスタッフだけでは対応することができない数の留学生が部屋

を訪れ、また、ローテーションには授業の都合等に入れませんが、昼休みやほかの時間帯には活動に関わりたいたいという日本人学生も出てきた。ボランティア学生を巻き込みつつ、105の運営を行っていくことになり、ゆるやかに結びついたボランティアグループが形作られた。交流イベントの実施にも積極的に取り組んでもらうこととなった。

集まった学生は学年も専攻もバラバラだったが、立ち上げの時期に活動の中心となってくれたのは、学部の4年生であった。その後、全体としては、若い学部学生が、上級生の活動を引き継ぐような流れで、105の活動が継続されている。現在では、学部の3年生と2年生が活動の担い手の中心となっているが、大学院生や学部留学生、短期交換留学後に105に復帰し活躍している4年生もいる。105活動に集う学生の中には留学を予定している学生も少なくない。学生スタッフが途中で留学のために抜けてしまうのは105にとっては痛手であるが、自ら留学体験を積んだ学生がまたスタッフとして活躍してくれるのであれば、歓迎すべき状況であるかもしれない。

いずれにしても学生である以上、同じメンバーが105にずっと留まっていられるわけではないので、新人のスタッフの確保も重要な事柄となる。2003年度から新入生に105の活動を紹介するちらしを配布、2004年度には、学生たちの手によって、新入生向けに説明会も行われた。学生スタッフとして活動する意思のある新人の学生に対しては、生活指導部門教員が個々の学生と面談し、オリエンテーションを行っている。

現在、リストに名前を連ねている学生スタッフは40人から50人であるが、彼らが常時、稼働できるわけではない。このうち20人程度の学生が互いにスケジュールを調整しながら、活動を行っている。円滑な運営が行われるよう、生活指導部門の教員は学生と密にコミュニケーションをとるよう心がけているが、現在留学生センターの他部門（日本語教育部門と短期留学部門）の教員の一部がオフィスアワーを105で過ごし、105スタッフと教員との連携もさらに深まっている。また、2004年度からは、住宅情報収集等を担当する非常勤職員が週2日105に在室するようになり、住宅関連についての相談に対応している。

4. 105の運営・組織・設備等

4-1 105の運営

105の立ち上げ後1年ほどは、生活指導部門教員（藤井）の主導で、学生スタッフのリーダーと相談しつつ105の運営を行った。現在は、学生の自治的側面が強まり、留学生センター生活指導部門の指導のもと、学生にその運営を委ねている組織ということができるかと思う。学生達は各学期に一度スタートアップ・ミーティング（総会）を行う。その学期の活動報告を行い、105のあり方や活動全般についての確認、各業務担当者の決定、新入留学生の受け入れの準備、学生スタッフのシフト作成、新入生のリクルート計画、イベントの実施計画、広報活動の計画などについて話し合いを行う。生活指導部門の教員はこれらについて報告や相談を受け、必要に応じて助言する。学期が始まると同時に毎日の相談活動を開始する。学期期間中は曜日を決め、昼休みにウィークリーミーティングを行い、連絡事項の確認やそのときどきの問題について話し合い、その結果はメーリングリスト（ML）に流し、欠席者を含む全員（スタッフ、教員他）が共有する。日々の連絡や、イベントの連絡・報告、意見交換、情報交換はMLでも行う。現在パソコンのMLと携帯電話MLの2つが使われている。教員との連絡、相談等はいつでも自由に行う。

105室の鍵の管理は生活指導部門の教員2名（藤井・門倉）が行っている。担当の学生は部屋を開けるときに担当教員のところへ鍵をとりに行き、部屋を閉めるときに鍵を返却に行く。鍵のやりとりは煩わしくもあるが、学生と教員が顔をあわせ、コミュニケーションをとる場にもなる。教員は、活動内容については、MLや、学生からの報告や相談で把握する。また教員からの連絡もMLを活用するほか、毎週のミーティングを通じて行う。必要に応じて個々のスタッフとも連絡をとっている。

4-2 105の組織

大まかなところでは、以下のような組織図ができています。各分野のヘッドを決めていた時期もあるが、現在はそれぞれの分野の下位の項目の仕事に対して、それぞれ担当者を決め、活動が行われている。

○105代表者（室長）： 全体のまとめ役、教員との連絡

- 人事： シフト管理、ML管理、名簿作成、新規スタッフの募集
- 管理： 105の備品・図書・写真の管理
- 広報： ホームページ管理、105案内、ニュースレター作成、資金管理他
- 会計： 会計報告
- 情報： 情報の管理、掲示板管理、アンケート実施
- イベント： イベントの企画・実施・報告

学生の参加が流動的なため、105をきちんと組織化するのは難しい面があるようだ。組織図を描いて担当者をはりつけただけでは、うまくいかないこともわかってきた。これまでの経験から判断すると、105がうまく機能するかどうかは学生個々の意識や力量にかかっており、どうすれば105が留学生にとって魅力あるところとなりうるのかを主体的に考え、プランを描き、実行できる学生スタッフを育成できるかどうかポイントであると思われる。

4-3 105室の設備等

現在105には、以下のものが備わっている。本棚3、蔵書数十冊、机3、いす約20、パソコン4、プリンタ1、電話、収納庫2、ラジカセ、冷蔵庫、調理器（電気炊飯器20合炊き、電気ポット、電気調理器）、ビデオ、カメラ、その他。

これらは、留学生センターの建物ができた当時、図書室として設けられた105室の備品をそのまま受け継いだもの、学生が調達してきたもの、2002年度に学長裁量経費を得て購入したものである。パソコンのうち3台は学内の総合情報処理センター管理下のもので、データの保存はできない。図書は、日本語のテキスト、日本文化紹介書、地図、旅行案内書、各国語辞書、各国語入門書、日本語学習雑誌等がある。一部は貸し出しを行っている。これらは、留学生が直接利用するほか、おしゃべりの題材等としても利用できる。図書については、さらに充実をはかっていく予定である。

5. 105の活動内容

105の活動は、毎日の「相談活動」と、交流イベントや日々の接触を通じての「交流活動」のふたつが主なものである。2年目からは、これに加え

て、渡日直後の新入留学生の受け入れに伴うサポート（出迎え、宿舎案内、外国人登録他諸手続きの手伝い）も受け持ってもらっている。

5-1 毎日の相談活動他

105は学年暦にあわせて、長期休暇をのぞく前期、後期の平日、月曜日から金曜日までの毎日昼休みを含む約3時間開室（注7）し、学生スタッフが来室者に対応している。開室時間は学期によって調整がおこなわれているが、現在は、月曜日12時10分から2時、火曜日、水曜日、金曜日は、11時から午後2時、木曜日は12時10分から午後5時までである。できれば、継続して同じ時間帯に開室しているのが望ましいが、昼休み前後の時間帯は授業をとっている学生も多く、毎回調整に苦労しているようである。105で相談活動として想定しているのは、情報の提供、生活相談、事務手続き（書類書き等）の手伝い、日本語学習の手伝い、日本語の会話の相手、日本語のチェックなどである。また交流活動としては、おしゃべりの相手などである。開室時間は両開きのドアを広く開けておく。また、来室者がリラックスできるように、お茶やコーヒーを準備し、部屋も写真や小物（留学生のおみやげなど）で飾る。だれがスタッフかわかるよう名札を首からかけておく。こうした細かい点にも注意を払うようにしている。

以下に示す表1、表2は、2002年5月から2004年前期までの105の利用状況を、来室者記録をもとに表にしたものである。来室者の記録は留学生に毎回書いてもらっては負担にもなり、また気軽に立ち寄ってもらうという趣旨ともあわないので、スタッフがあとで記入するなど柔軟に対応することになっている。そのため記入忘れもあり、厳密な数字は得られていないが、ある程度の傾向は読み取れるであろう。まず、はじめに留学生の所属別の来室者数を示す表1から見る。

この表に示された合計の数値を見ると、105は研究生に最もよく利用されていることがわかる。2004年度前期以外では、どの期においても数値が高い。研究生の場合、日本に来てから日が浅い学生も多く、日本語学習や情報入手においてサポートの必要度が高いためと考えられる。大学院生が研究生に次ぐ数値を示しているが、留学生全体に占める大学院生の割合が現在5割を超えていることを合わせて考えると、105を利用している大学院生の利用率はそれほど高くないことがわかる。逆に、短期留学生、教員研修生、日

表1 105の来室者数(所属別)

期間 ()内は月	大学院生	学部生	研究生	短期留学生 JOY	短期留学生 個別	教員研修生	日本語予備教育	不明及其他	合計
2002(5-7)	51	44	75	10	8	1	0	31	220
2002(10-2)	39	26	53	21	1	16	10	18	184
2003(4-7)	27	50	52	7	2	2	26	26	192
2003(10-1)	38	26	50	21	1	16	10	17	179
2004(4-7)	37	34	14	31	0	2	12	11	141
合計	192	180	244	90	12	37	58	105	916

本語予備教育研修生は合わせても全体の1割に満たないことから見れば、彼らの105の利用度は高いと言える。これらの留学生は来日後間もない点、留学生センターで授業を受けている点が共通している。後者の点と、先の大学院生の利用率が低い点とを考えあわせると、留学生センターによく来ている留学生ほど、105の利用率が高いという当然の帰結が見てとれる。

次に、利用目的の件数を示す表2を見る。

表2 105室の来室者(利用目的の件数)

期間 ()内は月	日本語 会話	勉強 (日本語 他)	手続き	生活	その他(交流/図書/その他/不明)	合計
2002(5-7)	56	29	1	12	122	220
2002(10-2)	47	13	7	9	108	184
2003(4-7)	54	33	4	13	88 (- / - /49/39)	192
2003(10-1)	45	21	6	9	98 (- / - /35/63)	179
2004(4-7)	11	24	18	10	78 (45/9/4/20)	141
合計	213	120	36	43	512	916

全期間を通じて最も多いのは「その他」の項目である。「その他」の多くは「交流」と見てよいであろう。2004年後期の「その他」の内訳を見ると半数以上が交流を目的としていることから、そのことが類推できる。スタッフや他の留学生と交わり、楽しく交流を深めているようだ。日本人学生との交流(特におしゃべり)を通して、日本人の考え方を知ることができるのが、105の最大の利点だと言っている留学生もいる。

「その他」のほかの項目で一番多いのは、「日本語会話の練習」を目的と

するものである。105の学生は日本語を話してくれるところがいいという留学生もいる。留学生というと英語で話さなければいけないという思い込みを持つ人もかなりいるようである。確かに英語での対応を望む場合もあるだろうが、むしろ日本語で話してほしいと望んでいる場合も少なくない。105の学生も活動の中で留学生が求めているものが何かを知るようになったのではないだろうか。会話練習の相手がほしいという要望は、以前から留学生の側から出ていたことである。留学生センターが提供している日本語の授業を補完する、こうした側面も、105が果たしているひとつの役割としてあげることができるであろう。

学生との会話の利点として、「ですます体」ではない、普通体の会話が勉強できると指摘する留学生もいる。日本語の授業では「ですます体」の日本語が基本となっているため、教室内の日本語と教室の外で触れる普通体の日本語の違いに戸惑う留学生もいる。日本語教育の観点から言えば、最も利用度の高い「ですます体」を身につけることが基本であるが、留学生が学生同士のおしゃべりを理解し、その輪に入りたいという気持ちを持つのも当然のことであろう。

2番目に数値の高い項目は日本語を含む「勉強の手助け」である。日本語の表現についての質問や、レポートの添削、読解の手助けなどを行っている。これらの対応には時間をとられることもあり、学生スタッフもどこまで手伝うかについて線引きをする必要がある場合もあるようである。留学生への支援は、あくまで留学生が自立して日本での生活を営んでいけるように手伝うことであり、留学生の過度な要求にまでは応える必要はないと考え、指導している。

「生活に関する相談」については、携帯電話の購入についての質問など、学生が得意とする情報が提供できる場合もあるが、調べなければ答えられないような相談を受ける場合もある。学生のスタッフにも、留学生に関わる状況をよく理解し、その上で必要な情報が提供できるようにスタッフとしてのスキルをみがいてほしいと考えている。学生の中には、難しい相談にも熱意を持って対応し、期待以上の対応をしてくれる者もいるが、105全体としての対応を向上させるため、情報の蓄積にも努めてほしい。学生で応じきれない相談については、生活指導部門の教員や専門のカウンセラー、住宅関係のアドバイザー、各部局の留学生担当の教員等へ回すように指導している。

件数としては減るが、「手続きの手伝い」も留学生のニーズとしては、確実に存在している項目である。105に期待することとして、これを真っ先にあげる留学生もいる。学内の事務手続きの書類の記入をはじめ、役所から来た書類の読み取りなど、本人だけでは処理できない手続きの手伝いを行う。専門の勉強が忙しく、留学生センターから遠ざかってしまった留学生が、ひょっこり書類書きの手伝いを頼みに105を訪れたのを見かけることもあった。

最後に来室者数全体を見ると、必ずしも利用者数は増えてはいない。これについては、昨年度の集計を担当した学生スタッフによれば、実際は2倍か3倍の留学生が来ているが、スタッフに挨拶するだけで帰ってしまう来室者や、教室の場所の確認など一言で解決してしまう来室者については、特に記録していないものも多いようだとのことである。部屋のにぎわいから見ると利用者は増えているような印象であるが、記録自体が確実なものではないので、きちんと比較することはできない。ただ、留学生のニーズに応えられているのか、利用しやすい部屋となっているのかなどについては、常に念頭において学生スタッフに活動してほしいと考えている。

5-2 105の交流イベントの開催について

毎日の相談・交流活動の他に、学期に数回、交流行事が企画実施されてきた。105がこれまでに行った交流イベントを表3 (pp.82-83) にまとめてみた。交流イベントは留学生だけでなく、日本人学生にも参加を呼びかけ、交流の輪を広げることを意図している。イベントをきっかけに知り合った人たちを通じて、留学生が日本でのネットワークを広げることにつながる。105の存在を知ってもらうきっかけにもなる。行事の企画、実施にあたっては、先輩格のスタッフと新人のスタッフが協力して行い、これまでのイベント開催の経験を生かしつつ、また新たな視点を取り入れて行事が実現されるように取り組んでいるようである。105が立ち上がった当初は教員が、口も出し、手も出したが、間もなく、ほとんどのイベントにおいて学生にまかせるようになった。

105がこれまで行ったイベントを概観してみると、交流イベントも少しずつ進化していることがわかる。

1年目には、まず顔を合わせるパーティー、つづいて共に目標に向かって取り組むゲーム大会やスポーツ大会を行った。8月のバーベキューでは、イ

スラム教の留学生にも配慮して、ハラールミート（イスラム教の所定の手続きによって処理された肉で、イスラム教徒も食べることができる）を購入した。後期には、昼休みという短い時間を利用して、105で炊いた炊き立てのご飯を参加者が自分で握る「おにぎりパーティー」を行った。また、茶道部の協力を得て、日本文化を体験するお茶会も実施した。

2年目からは、1年目の交流イベントにプラスして、新入留学生を対象にキャンパスツアーを実施した。イベントを行う手際もよくなった。

3年目には、「アステージ」(注8)と名付けられた行事を数回行っている。「アステージ」では、留学生による自国の紹介と参加者とのディスカッションを行う。直接その国の人を通してその文化について知ること、他の文化に対する興味や理解もいっそう深まるものと思われる。この企画は留学生スタッフが中心となって実現してくれたものである。夏休みには、留学生と日本人学生との交流合宿も実現することができた。合宿では、教員のレクチャー、コミュニケーションゲーム、グループディスカッション、キャンプファイヤー、花火、さらには夜を徹しておしゃべりなどで互いの理解を深めることができたと思われる。これらのイベントの中には、当初からアイデアは出ていたもののすぐには実現できなかったものもある。時を経て105としてイベント開催の経験を積み、また力をつけた人材を得て、実現が可能となったように感じる。

5-3 渡日直後の新入留学生の受け入れ

2003年度から4月と10月に来日する留学生センター所属の日本語予備教育研修生およびその他の大使館推薦の留学生の受け入れのサポートを引き受けてもらっている。渡日留学生の出迎え、宿舎への案内、外国人登録等の事務手続き、健康診断などの手助けをしてもらう。特に留学生センター所属の予備教育研修生は、渡日時に日本語が全く話せない学生も多く生活を始める上での手助けが欠かせないにもかかわらず、制度上チューターをつけることができない。他のプログラムの学生にたいする出迎えであればチューター謝金が出るだけに、ボランティアのサポートを頼むのに躊躇があったが、105の学生の側から申し出があり、まかせることとなった(注9)。留学生にとっては、渡日時のサポートは心強く思われ、印象も深いようである。その後の105でのサポートにもつなげていけるという利点もある。

表3 交流イベントのリスト

年月 ★印は新規	イベント	場所	参加者	備考
2002.2 ★	もちつきパーティー	留学生センター105	約50人	105を知ってもらう
2002.6 ★	ゲーム大会(日本の遊び) フルーツバスケット他	大会館	約40人	
2002.8 ★	バーベキューと花火観賞	学内野外音楽堂	約70人	ハラールミートも購入
2002.10~12 ★	おにぎりパーティー 月2回ひるやすみ	留学生センター105	毎回約20人	炊き立てご飯を自分で握る
2002.11 ★	運動会(玉入れ、二人三脚、パン食 い競争、フォークダンス他)	学内体育館	約40人	近隣小学校から用具を借りる
2002.11 ★	フットサル(室内サッカー)大会	学内体育館	約20人	
2002.12	プレゼント交換パーティー	留学生センター106号	約30人	
2002.1 ★	お茶会と もちつきパーティー	お茶会:大会館 餅: 留学生センター 105	約20人 約30人	茶道部の協力 電動餅つき機
2002年度★ 土日不定期	フットサル(室内サッカー)	学内体育館	有志が参加	
2003.4 ★	受け入れ	市内各機関	対象留学生約10人 参加スタッフ約10人	
2003.4 ★	キャンパスツアー	大学内各施設	約20人	学内施設の案内
2003.5	友達を作ろうパーティー	留学生センター306	約40人	日本の駄菓子を食べる
2003.7	スポーツデイ	学内体育館	約20人	各種スポーツ
2003.8	バーベキュー 花火観賞	学内野外音楽堂	約60人	ハラールミートも購入
2003.10	受け入れ	市内各機関	対象留学生1人 参加スタッフ2~3人	
2003.10	キャンパスツアー	大学内各施設	約30人	学内施設の案内
2003.11	運動会	学内体育館	約20人	近隣小学校から用具を借りる
2003.12 不定期	105 2 nd アニバーサリーパーティー おにぎりパーティー	留学生センター306 留学生センター105 104	約30人 毎回約20 ~30人	炊きたてご飯を自分で握る

表3 交流イベントのリスト

年月	イベント	場所	参加者	備考
2004.4	受け入れ	市内各機関	対象留学生約20人 参加スタッフ約10人	
2004.4	キャンパスツアー	大学内各施設	約30人	学内施設の案内
2004.5 ★	アステージ (ブルガリア)	留学生センター306	約15人	留学生による自国の文化紹介と参加との相互理解
2004.6	アステージ (チェルニジア/オマーン)	留学生センター306	約15人	
2004.7	七夕パーティー (日本の遊び)	大学会館	約30人	ゆかたを着てみる
2004.8	そーめん バーベキュー	学内野外音楽堂	40~50人	ハラールミート
2004.9 ★	交流合宿 (留学生、日本人学生、センター教員)	八王子大学セミナーハウス	約30人	レクチャー、交流ゲーム、グループ討論
2004.10	受け入れ	市内各機関	対象留学生1人 参加スタッフ2~3人	
2004.10	キャンパスツアー	大学内各施設	約30人	学内施設の案内
2004.10	アステージ (インド)	留学生センター306	約20人	
2004.10 ★	ショッピングツアー	横浜市内	約10人	
2004.11 ★	みかん狩り	津久井浜観光農園	約30人	
2004.12	アステージ (キルギス) と おでんパーティー	留学生センター306	20~30人	朝からおでんを煮込む

6. 105に求められる支援

6-1 留学生が105に期待すること

次に留学生へのアンケート結果から、留学生が105にどんなことを期待しているかをみてみたい。2003年度後期末に105スタッフが留学生に対して行ったアンケートの中で、「105に求めるもの」として回答された項目は、回答数の多いものから「勉強の手伝い19」、「日本人紹介16」、「情報提供15」、「日本語会話11」、「イベント8」、「相談相手8」の順であった（数字は回答数）。先の105の利用目的記録の集計結果と比べると、「日本語会話」のニーズが少なくなっている点が少し異なるが、勉強を手伝ってほしいという留学生が多い点では共通している。

また、105への要望としては、以下のようなものがあった。「広いスペースで多くの人と知り合いたい」、「スポーツがしたい」、「開室時間を長くしてほしい」、「日本人との交流や会話の機会がもっとほしい」、「スポーツイベントを開催してほしい」、「時間外も交流したい」、「サークル情報がもっとほしい」、「カラオケ大会を開いてほしい」。これらの要望に共通しているのは、

手段は異なるが、留学生がほかの人との交流の機会を求めているという点ではないかと思う。

以前はよく105を訪れていたが、最近見かけなくなった留学生数人（全員日本語予備教育の研修生）に105についていくつかの質問を行った。105の利用目的については、「会話の練習」、「日本人学生との会話から日本人の考え方を知るため」、「手続きの手伝い」、「書類書きの手伝い」、「日本語の手助け」をあげていた。最近105を利用していない理由を尋ねたところ、全員が「専門の研究が忙しくて来られない」という回答であった。「以前105で得られたサポートが、現在研究室など身近なところで得られるか」を尋ねたところ、「周りにも助けてくれる人がいる」という回答や、「手伝ってもらわなくてもなんとかできるようになった」という回答があった。また、「来日してまだ日本の生活に慣れていない時期に105は特に役に立った」という点が共通のコメントとして聞かれた。この他、105を訪れなくても、105で出会った学生との友人としてのつきあいが続いているという話を聞くこともできた。学生スタッフから、既に本学を去った留学生とも交流が継続されていることを聞くこともある。105での出会いが普通の友人としての交流に発展していくことは最も期待したいことでもある。

6-2 105学生スタッフは自分たちの活動をどう見ているか

2003年度後期のスタートアップ・ミーティングの資料によると、活動を振り返ってみて良かった点として、「イベントをうまく実施できたこと」、「イベントの企画と実施に関わり達成感をもてたこと」、「留学生がスタッフとして加わったこと」、「下級生がうまく育っていること」などがあげられている。一方反省点として、「相談業務をもっと充実させるために準備（情報収集など）が必要である」、「昼休みは人が多すぎて、留学生が入りにくい雰囲気になっている」、「105に売りが無いが、留学生のニーズを考えて、それに応える部屋を目指したい」、「チーム分けされたが、役割分担がうまくいかなかった」、「仕事分担をもっとして、各自が「私が105を担う」くらいの認識を持って積極的に取り組めたらいい」、「部屋の掃除・整理整頓をもっと心がけよう」などがあがっている。また、そのほか105室について、「スタッフと留学生もそれぞれが楽しめる部屋にしていきたい」、「留学生のためのボランティアというと一方的で気負ってしまうから、違う文化を持った人たち

と話せるところぐらいに考えたい」などの意見があった。

イベントの開催については、下級生を巻き込みうまく実施できるようになった時期で、肯定的な意見が多かったが、相談活動等については、不十分であったという認識がある。仕事の役割分担がうまくいかなかったことも反省点として出ている。留学生のニーズに応えようとする気持ちを持つスタッフが多い点は心強く感ずる。

ここで出ている反省点については、これ以降、現在でも学生から同じような指摘を聞く。相談活動に関するものが知識や経験として引き継がれるのが難しいからかもしれない。しかしながら最近では、相談や質問にその場その場で応ずるだけでなく、これまでの活動から得られた情報をきちんと蓄積し整理し、必要に応じて発信しようという動きもでてきている。たとえば先日、携帯電話の購入に関しての情報をまとめたものが作成されている。ここには悪質メールへの対応などについても触れられている。今後もこうした動きが推進され、引き継がれていくことを期待している。

105の活動の中で、支援する側の日本人スタッフや留学生スタッフがこの活動と通じてどのような変容を遂げているかについては、まだきちんと把握できていないが、3年ほど前には、まだたよりなさそうだった新入生もいつの間にか、下級生を導く存在に成長している。2004年度の合宿では、上級生だけでなく1年生の多くが、105が留学生に対して何をできるかについて真剣に考え、話し合っていた姿を頼もしく思った。

7. まとめと今後の課題

本稿では、105のこれまでの活動を、活動内容や運営状況等を整理した上で分析し、考察した。留学生の105の利用状況からは、来日してからの期間が短い研究生や短期プログラムの学生、教員研修生、日本語予備教育研修生によく利用されていることが確認できた。これらの留学生の多くは留学生センターの日本語の授業を受講しており、授業の後や授業の合間に105を訪れるケースが多いと考えられる。105の利用目的を見ると、日本語会話の練習や勉強の手助け、手続きの手伝いなど日本語の使用に関わるもの、また日本人学生との交流を目的とするものが多い。来日間もない時期には、学内でのネットワークも十分ではなく、日本語学習と同時に交流への関心も、その必要性も高いことが伺える。一方、留学生も大学院に入学し専門の研究

が忙しくなると、センターの日本語の授業から遠のくと同時に105の利用も減る傾向が見られる。この時期には、学内でのネットワークも広がり、日本での生活に必要な日本語もある程度習得し、まわりのサポートに以前ほど頼らずに、自分で問題が解決できるようになると考えられる。

これらのことを考えると、留学生センターに設置されている105には、留学の初期に、日本での生活の自立に向けての支援を行うという役割が特に大きいということができるだろう。しかし、同時に、留学生が105から遠ざかったのちも、個人的な交流の継続があることは、105が出会いの場としても意味を持つことを示す点といえる。

交流イベントについては、今年度から始まった「アステージ」のような文化交流的なイベントにおいては、留学初期の学生だけでなく、より広い範囲の留学生を巻き込んでいける可能性もあり、今後の発展と充実を期待したい。

運営上の課題としては、学生スタッフを育成していくこと、これまで105で蓄積してきたものが活用できるよう、資料等をきちんと整理していくこと、留学生に必要な情報を提供できるように情報の整理と蓄積を継続して行うこと、学生スタッフのスキルアップをはかることなどがある。これらの課題については学生スタッフも認識しており、すでに取り組みも試みられている。教員側としては、彼らの試みがうまく進むよう支援していきたいと思う。また、学生スタッフには、留学生支援に関わる様々なアイデアを留学生といっしょになって考え、試してほしいと思う。

105の活動が常に安定した状態で継続されていくとは限らないであろうが、105が留学生にとっても日本人学生にとっても相互理解を深め、成長していくひとつの場として機能することを願い、今後も指導・支援をつづけていきたい。

注

- (1) 「105」の学生スタッフは日本人学生が大多数だが、一部、留学生のスタッフもいる。留学生の観点からのアイデアや発想を提供してくれる、心強い存在である。
- (2) 以下、主に「105室において行われている交流・相談体制」という

意味で、「105」と表現する。「105」は留学生センターの一室であるとともに、学生スタッフ、ボランティア学生、教員が一体となった「留学生支援体制」をさしている。

- (3) 105の活動に比較的近い事例としては、一橋大学とお茶の水女子大学で、大学院生がチューターとして一室に交代で毎日待機し、来談者の相談に応じている（一橋大学については井村倫子（2004）、お茶の水女子大学については加賀美常美代（2003）参照）。ただし、少数の大学院生スタッフが対応している点、気軽なおしゃべりを含む「交流」の要素が少ないように思われる点が、105とは異なる。気軽なおしゃべりを含む「交流」を中心とする活動としては、長崎大学や広島大学での「会話パートナー」、名古屋大学での「パートナーシップ」の取り組みが見られる（門倉正美（2000）で、その意味についてふれた）。「交流コーディネーション」という観点からみた、日本人学生と留学生の交流のあり方一般については、例えば『留学交流』（ぎょうせい刊、2003年8月号）の特集が参考になる。
- (4) 2002年度までの活動の自己点検の一環として、105の活動についても報告している（横浜国立大学留学生センター（2004）、pp.127-129, pp.135-136参照）。2003年秋に行われた外部評価・学内評価では、105の活動に対する評価はおおむね高いものだった（同上、pp.160-170, pp.175-178参照）。最近刊行された、留学生アドバイジングについての本格的な概説書である、横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイジング』は、留学生と日本人学生や地域住民との交流を促進する、「キャンパスにおける交流コーディネーション」について、「残念なことに交流を促進することは重要な教育活動と考えられておらず、交流コーディネーションは留学生担当者の「業務」になっていない」（pp.222-223）と述べている。たしかに一般的にはそうした傾向が見られるが、一方では、「センターは「105」のような大学にとって重要な活動も展開していることを一層周知する必要がある」（横浜国立大学留学生センター（2004）、p.167）という見解もあることを、「交流コーディネーション」に携わる者として、励ましと受け止めたい。
- (5) このワーキンググループの検討結果は、「留学生支援体制検討ワーキン

「ワーキンググループ最終報告」(2002年2月5日)にまとめられている。また、このワーキンググループで留学生支援体制について議論したメンバー(主に、各部局の留学生担当教員、保健管理センターのカウンセリング教員と留学生センター教員)が中心となって、ワーキンググループ解散後も留学生支援に関する情報と意見を交換する「連絡会議」を月1回行うようになり、2002年10月からは、「留学生支援方策検討専門小委員会」として、国際交流委員会の下部委員会と位置づけられ、活動を続けている。

- (6) 横浜国立大学留学生センターにおいては、1995年度から、教養教育科目のクラス「異文化間コミュニケーション論」において留学生と日本人学生の交流を実践してきている。このクラスについては、門倉正美(1996)を参照。
- (7) 105の閉室時間については、スタッフの都合がつけば、来室者に対応して延長する日も多い。
- (8) 「アステージ」には、名づけた学生によると、「1. A stage 2. earth on the stage 3. us on the stage 4.us+提示」という4つの意味がかけられている。留学生が自分の国や地域について話す(提示する)場を一つのstage(舞台)とみる。Earthは世界中の国や地域をすべて含むという意味である。また、その国の人だけが話すのではなく、参加者もいっしょに話ながら進めていくことから、us(私達)の意味も入っている。
- (9) 2002年10月、神戸大学の国際交流グループ「トラス」の学生が本学の留学生センターを訪れ、トラスの活動についての話をしてくれた。このとき、トラスの主な活動のひとつに渡日直後の留学生の受け入れがあることが紹介された。そして、受け入れに関わるやりがいや苦勞などを聞いた学生が、105でも受け入れをしたいと申し出てくれることになった。他大学の国際交流団体との交流は学生にとって大きな刺激となる。2004年3月には、学生スタッフ3名が、アトラス(学生の国際交流団体経験者が集まって作った組織、神戸大学のトラスの学生はメンバーのひとりである)主催の研修会(「国際交流を実践する学生のための研修会」於：淡路島・淡路青年の家)にも参加した。その研修を通して、学生が受けとめたものは大きく、その後の105の活動に

においてもさらに積極的な姿勢が見られるようになった。

参考文献

- 横田雅弘・白土悟（2004）『留学生アドバイザーズ』、ナカニシヤ出版
- 井村倫子（2004）「国際資料室における来室状況の分析－院生チューターの役割を中心に－」『一橋大学留学生センター紀要』第7号
- 横浜国立大学留学生センター（2004）『横浜国立大学留学生センター 自己点検（1998年度～2002年度）・外部評価報告書』
- 『留学交流』、ぎょうせい刊、2003年8月号
- 加賀美常美代（2003）「留学生相談」『お茶の水女子大学留学生センター年報』第1号
- 横浜国立大学外国人留学生委員会・留学生支援体制検討ワーキンググループ（2002）『留学生支援体制検討ワーキンググループ最終報告』
- 門倉正美（2000）「大学における国際交流ボランティア－その現状と可能性－」『横浜国立大学留学生センター紀要』第7号、pp.13-26
- 門倉正美（1996）「留学生と日本人学生との混成クラスの試み－教養教育「異文化間コミュニケーション論」授業報告－」『横浜国立大学留学生センター紀要』第3号、pp.55-67